

令和3年度高齢期の幸福度に関する報告書追跡調査編 概要版

1. 調査の目的と方法

『高齢期の幸福度調査』は平成28年度より実施されており、市内高齢者を生物学的な面と心理的な面から調査を行い、亀岡市における有効な地域包括ケアシステムの下、幸せで健康的な高齢期を創設する為のエビデンスデータの蓄積を行うことを大きな目的としている。

今回は、平成28年度から30年度までに実施した初回調査と令和元年度から令和3年度に実施した追跡調査の両方に参加した950人のデータから、亀岡市在住の自立高齢者の3年間の幸福感の変化とそれに関係する要因を検討し、報告する。

今回の調査においては、主観的健康感、幸福感（WH05-J）、要介護リスク（基本チェックリスト）、心理状態（老年的超越）について3年間の追跡を行なった。追跡調査においては、それらに影響すると考えられる、日中の過ごし方や主観的な経済状況などの項目について、訪問調査および郵送調査にて収集した。

2. 追跡調査の参加状況

表1 追跡調査対象者の参加状況

表1は、初回調査の年度別に、各年度の参加者が3年後の追跡調査において調査に参加したかどうかを示したものである。平成28年度から平成30年度までの合計の初回調査に参加した自立高齢者は1,382人あり、このうち追跡調査への参加者は令和元年度から令和3年度までの3年間で950人となった。追跡率は68.7%と十分に高い結果となった。年度別にみるとR3年度の追跡調査参加率が74.6%で最も高かった。

初回調査 年度		追跡調査への参加		合計
		不参加	参加	
H28年	人数	208	418	626
	割合	33.2%	66.8%	100.0%
H29年	人数	131	259	390
	割合	33.6%	66.4%	100.0%
H30年	人数	93	273	366
	割合	25.4%	74.6%	100.0%
合計	度数	432	950	1382
	割合	31.3%	68.7%	100.0%

表2 追跡調査参加者の属性

表2は、3年間の追跡調査に参加した950人の年齢および性別の内訳を示したものである。70歳群593人、80歳群315人、90歳群42人が調査に参加した。男性、女性とも年齢別の比率は、70歳約62%、80歳約34%、90歳約4%であり、男女や年齢による参加比率に有意差はなかった。

性別		初回調査時の年齢			合計
		70歳	80歳	90歳	
男性	人数	249	143	15	407
	割合	61.2%	35.1%	3.7%	100.0%
女性	人数	344	172	27	543
	割合	63.4%	31.7%	5.0%	100.0%
合計	度数	593	315	42	950
	割合	62.4%	33.2%	4.4%	100.0%

3. 追跡調査における主要変数の平均値とその年齢差、男女差

次に、主要変数について、年齢・性別の6群に分け、追跡調査時の平均点を算出した。主観的健康感および要介護リスク（基本チェックリスト20項目合計点）については、年齢が高い群の方が有意に悪いことが示された。一方、老年的超越は年齢が高い程、有意に得点が高いことが示された。幸福感（WHOS-J）は年齢群による有意な違いはなかった。男女による平均値の違いは見られなかった。

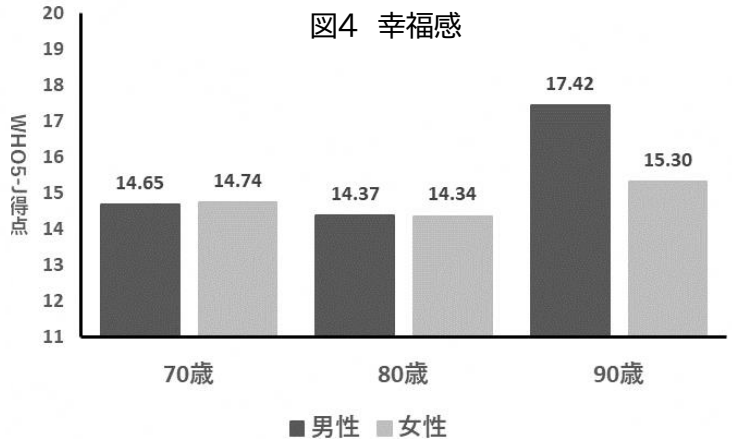
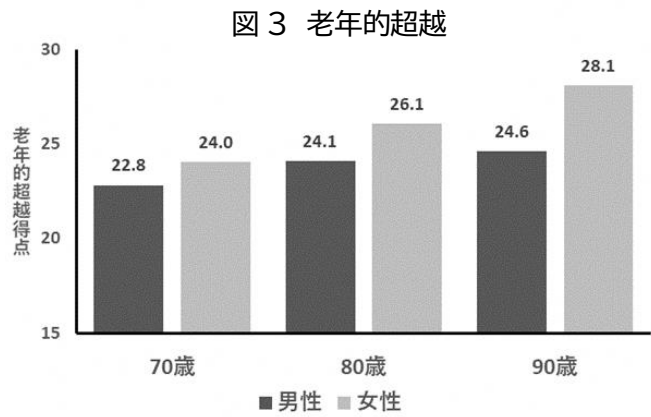
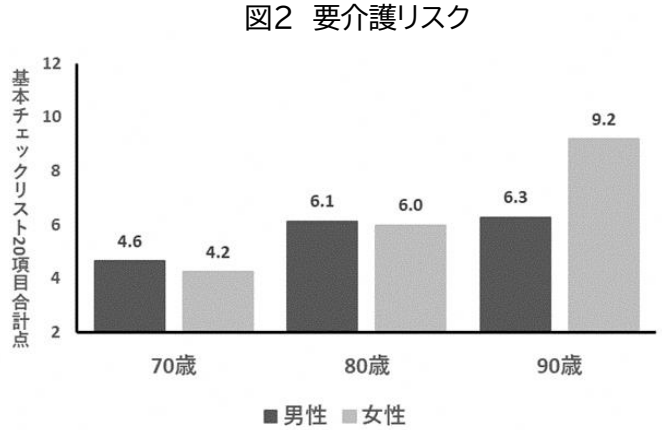
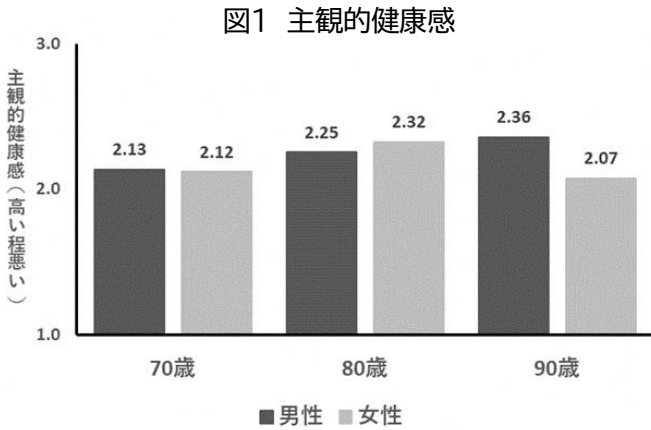


表3は、8種類の日中の活動について、年齢別に「している」と回答した人の割合を示したものである。年齢による実施率の差があるかを検討したところ、5種類の活動で70歳群の実施率が高かった。一方、「運動」、「学習・教養」「田畑の仕事」については、有意な年齢差がみられなかった。

表3 日中の活動の年齢別の実施率

	70歳(N=593)		80歳(N=315)		90歳(N=43)		合計(N=950)		年齢の有意差
	N	%	N	%	N	%	N	%	
収入のある仕事についている	152	26.5%	30	10.2%	3	14.0%	185	20.4%	70歳>80歳、90歳
ボランティアをしている	120	21.0%	36	12.2%	1	2.5%	157	17.3%	70歳>80歳、90歳
田畑の仕事をしている	235	40.8%	132	44.4%	18	43.9%	385	42.1%	
家事をしている	476	82.9%	202	70.1%	23	57.5%	701	73.8%	70歳>80歳、90歳
家族の介護をしている	61	10.7%	39	13.2%	6	15.4%	106	11.7%	70歳>80歳、90歳
孫の世話をしている	115	20.2%	20	6.90%	0	0.0%	135	14.2%	70歳>80歳、90歳
運動をしている	369	64.4%	197	66.8%	23	59.0%	589	64.9%	
学習・教養をしている	188	33.9%	94	34.6%	15	40.5%	297	34.4%	
その他	5	0.8%	4	1.3%	1	2.3%	10	1.1%	

4. 幸福感の3年間の変化と変化に関連する要因の検討

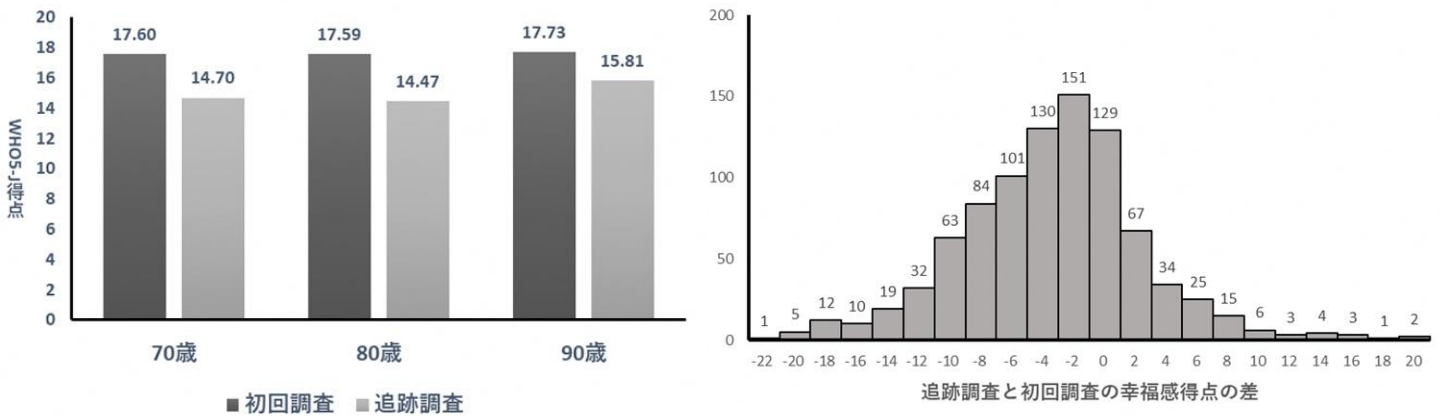


図3 幸福感(WHO5-J)の初回調査時と追跡調査時の得点変化と個人の得点変化の分布

図3の左図は、初回調査および追跡調査の両方に参加した950人の幸福感(WHO5-J)の平均点を年齢別に示したものである(性別は調整)。また、この時、各個人の追跡調査と初回調査の幸福感得点の差の分布を右図に示した。分析の結果、どの年齢群においても、初回調査から追跡調査において幸福感が低下していることが有意に示された。その低下は全体を平均すると2.93点の低下であったが、図3の右図からは幸福感が低下した人が68%だったのに対して、幸福感が維持または向上した人も32%いることもわかった。

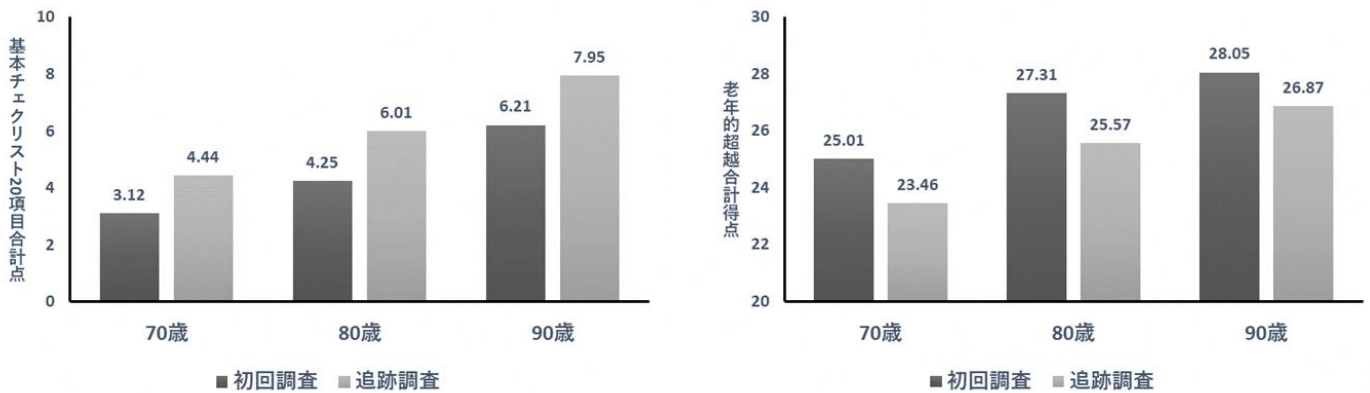


図4 要介護リスクと老年的超越の初回調査と追跡調査時の得点変化

調査参加者全体で見た時の幸福感の低下の原因を推測するために、要介護リスクと老年的超越の初回調査および追跡調査時の得点変化を検討した(図4)。その結果、要介護リスクは70歳群、80歳群、90歳群いずれにおいても追跡調査で有意に悪化し、老年的超越もまた有意に悪化していた。この両者は、高齢者の幸福感に影響することが先行研究や今回のデータからも示されており(詳細は報告書本分を参照のこと)、全般的なこれらの指標の悪化が幸福感の低下につながったことが考えられる。

更に、更に日中の活動のうち「田畑の仕事」、「運動」、「学習・教養」実施は、幸福感の有意な向上と関係しているが(本文参照)、令和2年度以降においては、新型コロナウイルス感染症の流行により、これらの活動をしている人が令和元年度よりも有意に少なくなったことが示された(表4)。これらの幸福感の向上につながる、活動の減少も幸福感の低下につながったと考えられる。

	令和1年度 (N=418)		令和2年度 (N=259)		令和3年度 (N=273)		合計 (N=950)		年度の有意差
	N	%	N	%	N	%	N	%	
収入のある仕事についている	78	18.7%	49	18.9%	58	21.2%	185	19.5%	
ボランティアをしている	70	16.7%	44	17.0%	43	15.8%	157	16.5%	
田畑の仕事をしている	175	41.9%	87	33.6%	123	45.1%	385	40.5%	R1年、R3年>R2年
家事をしている	303	72.5%	197	76.1%	201	73.6%	701	73.8%	
家族の介護をしている	55	13.2%	22	8.5%	29	10.6%	106	11.2%	
孫の世話をしている	60	14.4%	33	12.7%	42	15.4%	135	14.2%	
運動をしている	268	64.1%	171	66.0%	150	54.9%	589	62.0%	R1年、R2年>R3年
学習・教養をしている	157	37.6%	71	27.4%	69	25.3%	297	31.3%	R1年>R2年、R3年

5. 幸福感の3年間の変化の個人差を生み出す要因の検討

今回、参加者全体として、2.93 点の幸福感の低下がみられたが、個々人を見ると幸福感の向上した人も 32%いることが示された。このような初回調査と追跡調査の3年間の幸福感の個人差にどのような要因が影響、関連しているかを重回帰分析によって検討した。

重回帰分析は、目的変数に追跡調査時の幸福感 (WH05-J)、調整変数として初回調査時の幸福感 (WH05-J) として、説明変数として初回調査時、追跡調査時の諸変数 (右表参照) を一括投入して分析を行った。

重回帰分析の結果から、初回調査時の老年的超越が高い人、基本チェックリストの口腔機能の得点が低い (リスクが低い) 人は、3年後の追跡調査における幸福感が有意に高くなることが示された。更に、追跡調査時の経済状況の評価がよい人、日中の活動のうち、「運動」、「学習・教養」活動をしている人も幸福感が高いことが示された。

さらに、70 歳群と 80 歳 90 歳群では、追跡調査時の幸福感に影響する要因が異なっていた。80 歳群 90 歳群の後期高齢者では、老年的超越や口腔機能リスクの影響が強く、日中の活動のうち「田畑の仕事をしている」ことも幸福感と関連していた。また、「運動」や「学習・教養」の影響力が 70 歳群よりも強い傾向がみられた。

一方、70 歳群では、幸福感に対して、経済状況の影響が大きく、「家事をしている」ことは正の影響を持ち、「介護をしていること」が負の影響を示した。

これらの結果から、口腔機能に関する要介護リスクを下げることで、老年的超越を向上させること、「運動」、「学習・教養」活動をすること、後期高齢者の場合には「田畑の仕事をする」ことの重要性が再確認された。

表5 重回帰分析による、追跡調査時の幸福感に影響する諸変数の影響力の検討

変数名	対象者 ¹⁾			
	全体 (N=686)	70歳群 (N=453)	80歳90歳群 (N=233)	
	β	β	β	
初回時：幸福感 (WHO5-J)	.317 **	.382 **	.204 **	
性別 (男性=1、女性=2)	-.006	.005	-.003	
初回時：年齢 (70歳=1,80歳90歳=2)	.018			
初回時：老年的超越	.107 **	.080 +	.131 **	
初回時：KCL暮らしぶり ²⁾	.062 +	.032	.112	
初回時：KCL運動器 ²⁾	-.046	-.048	-.063	
初回時：KCL栄養 ²⁾	.033	.036	.040	
初回時：KCL口腔 ²⁾	-.082 *	-.012	-.177 **	
初回時：KCL暮らしぶり ²⁾	.041	.014	.051	
追跡時：経済状況	.140 **	.175 **	.113 +	
追跡時：日中の活動・有償労働 ³⁾	.043	.068 +	-.025	
追跡時：日中の活動・ボランティア ³⁾	.049	.044	.052	
追跡時：日中の活動・田畑仕事 ³⁾	.047	.007	.139 *	
追跡時：日中の活動・家事 ³⁾	.069 +	.052	.083	
追跡時：日中の活動・介護 ³⁾	-.081 *	-.091 *	-.032	
追跡時：日中の活動・孫の世話 ³⁾	.040	.024	.055	
追跡時：日中の活動・運動 ³⁾	.166 **	.143 **	.202 **	
追跡時：日中の活動・学習・教養 ³⁾	.127 **	.117 **	.146 **	
R ²	.336 **	.370 **	.327 **	
調整済みR ²	.318 **	.345 **	.274 **	
F値	18.76	15.04	6.16	

1:全体および年齢群ごとに重回帰分析を実施

2: KCL=基本チェックリスト 3: していない=0、している=1

3:群間の有意差の水準 **: p<.01 *: p<.05 +:p<.1